

## 福島飯舘村の悲劇

5月に飯舘村を訪れ、菅野典雄村長から話を伺って来ました。飯舘村と大舘村が対等合併して生まれた1956年の人口は1809世帯11403人でした。1986年10月村おこしセミナー開催を期に、**夢想塾**が誕生(その関係者から菅野村長と3人の村議ができました)。翌年の1月の「**新春ホラ吹き大会**」で若い女性が「**若妻の翼**」というホラを吹きました。「女性は結婚したら翼をもがれた鳥同然に、海外旅行なんて夢のまた夢。でも飯舘村の21世紀には、主婦の翼が飛んでいるはず」

ところがこれが村の事業として、すぐに実現したのです。1989年10月の農繁期に、村内20の地区から1人ずつ選ばれた30代の**若い嫁たち**が11日間の**ヨーロッパ旅行**をしたのでした。以後5年間継続され、91人の嫁さんがヨーロッパを訪れ、村に様々な変化をもたらしました。続いて1990年に**村民企画会議**が発足。普通の住民、若者、女性を積極的に15人選び、住民の**誰もが**容易に参加でき、**自由に**意見を述べられるようにしました。村の行政は出来る限り、意見を具体的な施策として実現していきました。1993年冷害に見舞われ、米が殆どとれませんでした。そこで米作中心から高原野菜、葉たばこ、花、酪農等の**複合的農業経営**への転換に拍車がかかりました。特に肉牛を育成して「**飯舘牛**」のブランドを全国に広め、餌の自給も果たしました。

飯舘村は、標高220~600mの高冷地独特の冷涼な気候です。11月上旬から霜が降り、氷点下15度にもなります。4つの川の流域25%が耕地で後は山林です。人口がほぼ半減してきました。**3人に1人は年寄り**です。しかし周辺の町村が次々と合併する中で、再度の合併はしないで自主自立の村作りの道を選んだことをきっかけに、**村民意識**が大きく変わりました。村が自立するために**自分が自立しなければ**と、村のことを真剣に考える村民が増えたのです。

菅野村長が村民にこう呼びかけました。「**までいライフ**——暮らし方を少し変えてみよう。戦後一貫して大量生産、大量消費、大量廃棄によってつくられてきた今日の日本経済の中で、少しスピードをゆるめてみよう。走っている人は歩く 歩いている人は立ち止まる 立ち止まっている人はしゃがんでみる。戦後一貫して効率一辺倒スピーディに、お金が全てという価値観で進めてきた結果、人と人との**関係が希薄**になり、自分さえ良ければ病になってしまった。**お互いさまのまでい**の心が必ずや**新しい日本**を再生する基礎になると思う。」

までいとは東北の方言で「手間ひまを惜しまず、丁寧に心をこめて、つつましく」等を意味します。そこで**質の良い飯館流スローライフ**を実現しようと菅野村長は呼びかけたのでした。「無いものをねだるのではなく、**あるものを探して生かそう**」と、村民が**自分の手で未来を切り開くオンリーワンの村おこし**に取り組み始めました。

例えば秋の農繁期に30代の農家の嫁たちを次々とヨーロッパ旅行に出したことがきっかけとなって、**子育てに夫も参加すべきだ**という思いが生まれ、村内の事業所に**育児休暇制度**が設けられ、村役場の男子職員は出産前後一ヶ月の育児休暇を義務づける「**子育て研修**」が制度化されました。また子育てに頑張る父親を励ます「**ナイスパパ表彰**」、また三人以上の子どもには年5万円の**育児クーポン券**を支給する支援を実施した結果、**出生率が県内トップ**になったそうです。

**小学校6年生**の3泊4日研修旅行は、12年間北海道へ行っていましたが、2年前から**沖縄**に変更しました。また「ふるさと納税」のお金を**ラオス**に学校をつくる運動に寄付し、全国から寄せられた絵本を、中学生が授業の一貫で**英訳**してラオスに贈り始めました。**中学3年生**は福島大学に研修入学し、大学生活を体験します。**学校給食**は村内産食材100%を達成しました。自分なりに田舎暮らしを楽しんでいる人には「**クオリティライフ顕彰**」が与えられます。

このように、長い年月をかけて、全村民あげて創意と努力を結集し、日本一の美しい村造りに取組んできた飯館村でした。それが **風上45キロ**遠方の海辺に建設された**福島原発の爆発**で放射能汚染の被害を受け、全村避難地区になってしまったのでした。親と子どもの家族が引き裂かれ、地区の共同体が解体されてしまいました。

**大都市**で急激に増加する電力需要の電源確保として安全神話とともに推進された**原子力発電**が、永年にわたる6000人の村民の美しい努力を**破壊**してしまったのです。原発事故は明らかに**人災**です。何人といえども、美しく生きようとする他人の努力を**理不尽に踏みにじる権利**は与えられていません。「**他に及ぼす影響を十分に考慮して行動する**」ことを、福島原発事故のもたらした被害を検証することで、再確認しなければならないと、**痛感**させられました。